

勝山歴史散歩マップ

時代を駆けた、もののふといさな捕りの浦

①源頼朝上陸地 (みなもとよりともじょうりくち)



石橋山で敗れた頼朝が真鶴から房総へ逃れ上陸した地。先着の北条時政が目印の旗を立てたのが旗立山。

②大黒山 (だいこくやま)



勝山捕鯨の祖・醍醐新兵衛の墓がある大黒山。頂上には城型の展望台がある。

③長谷寺観音堂 (はせでらかんのどう)



本尊十一面観世音。足利尊氏も深く帰依したと伝わる。元禄の大地震大津波の被災者供養の千人塚(水難記念碑)がある。

④浄蓮寺 (じょうれんじ)



小林一茶が訪れた寺。「わざわざに蝶も来て舞う夏花かな」はここで詠んだ句の一つ。

⑤妙典寺 (みょうてんじ)



新兵衛が再興した醍醐家の菩提寺。蝦夷開拓の8代新兵衛定綱の墓や、勝山藩義士の碑がある。

⑥加知山神社 (かちやまじんじゃ)



かつては牛頭天王社。7代醍醐新兵衛定香が大絵馬を奉納。境内に勝山藩儒者で藩校育英館教授の野呂道庵寿蔵碑がある。

⑦勝山陣屋跡 (かつやまじんやあと)



勝山藩の陣屋がおかれた場所。港通り片側は堀跡で、その南側一帯。現在は陣屋井戸が残る。

⑧鯨塚 (くじらづか)



鯨漁が終わるごとに感謝と供養のため出刃組により建てられた石宮群。板井ヶ谷弁財天境内。

⑨勝山城址 (かつやまじょうし)



戦国期の海城、水軍の拠点。曲輪跡や堀切、虎口の遺構がある。頂上には八幡神社がある。

⑩浮島 (うきしま)



景行天皇に関わる古代ロマンの伝説を秘めた勝山沖の風光明媚な島。穴の開いた大ボッケに沈む夕日は絶景。



再起をかけた源頼朝

治承4年(1180)8月、伊豆で挙兵した源頼朝は、石橋山の戦いで平家方に惨敗し、真鶴から海路安房へ逃れました。房総は源氏に心寄せる豪族が多かったからです。「吾妻鏡」によると8月29日、頼朝は土肥実平を供に安房国胤島に着き、先着の北条時政らと再会しています。胤島は現在の鋸南町竜島。安房には14日間滞在し、体制を整え、安西、丸千葉、上総氏ら各地の豪族を味方にし、勢力を盛り返した頼朝は、房総半島を北上、東国の武士団を糾合し大軍団となり、敗残からわずか1ヶ月余りで鎌倉入りを果たしました。頼朝の大逆転、武家政権誕生のものはここから始まります。



○頼朝伝説「ツノなしサザエ」

舟から竜島の岩場へ上陸した頼朝、知らずにサザエを踏んで足を痛めます。怒った頼朝は「竜島にサザエあるともツノあるな」と一喝。以来竜島のサザエにツノは無くなったとか。

日本料理発祥の地 浮島伝説

東国遠征の途中のヤマトタケルノミコトが相模から房総へ渡る時のこと、嵐で船が沈みかけました。妃のオトタチバナヒメは海神の怒りをしずめるため、身代わりとなって海に身を投げました。嵐はおさまり、一行は無事房総へ渡ることができたのです。オトタチバナヒメのなきがらが流れ着いたのがミサゴ島(ミササギ島)と伝えられます。

後にヤマトタケルの父、景行天皇は東国に向かい、風光明媚な浮島が気に入り、しばらく滞在されたと言います。この時、同行していたイワカムツカリノミコトが浜辺でとれた白ハマグリや釣り上げたカツオを料理し天皇に差し上げたところ、たいそう喜ばれ、以後ムツカリは天皇家の料理をつかさどることとなり、後に料理の神様として浮島神社に祀られました。7月の勝山地区祭礼には島渡し神事が行われます。



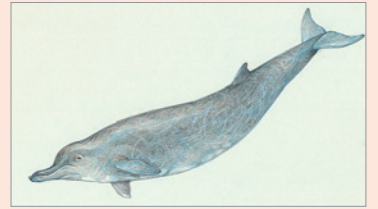
戦国の海城 勝山城

勝山城は勝山地区南方の八幡山にあり、里見水軍の拠点として戦国期の典型的な海城でした。ここから水軍を繰り出し、相模の北条水軍と戦いを繰り返していたようです。城主は正木安芸守輝綱と言いい内房正木一族です。三浦から勢力を伸ばしてきたと思われる海の豪族で、独立性があり、実は里見氏の勢力化に組み込まれていましたが、しばしば反乱分子となっていたようです。遊歩道がある勝山城址には眺めのよい平坦な曲輪跡や堀切、虎口などの遺構を見ることができます。



房総捕鯨の発祥 醍醐新兵衛と鯨組

大黒山中腹に、房総捕鯨の祖、醍醐新兵衛定明(初代)の墓があります。寛永7年(1630)勝山に生まれた定明は、名主として村を治める一方、漁師たちをまとめて捕鯨業を組織化し、その元締めとして勝山捕鯨の発展の基礎を築きました。定明は、勝山村大組、新組、岩井袋組という鯨組の組織を作り、合計57せきの船団で、鯨道と呼ばれた勝山浮島沖にやってくるツチクジラを捕っていました。漁期は6月から8月。見張船が沖に鯨を見つけると、いっせいに船を出しモリでしとめる突き取り漁です。



捕った鯨からは商品価値の高い鯨油を絞り出し、鯨の赤肉は鯨組の漁師たちに分配されます。これを夏場ですので、保存用に天日に干してできたのが、房総の郷土食である鯨のタレです。



鯨を解体するのが出刃組と呼ばれる専門部隊。彼らは漁期が終わるごとに、鯨への感謝と供養のために、小さな石宮を板井ヶ谷の弁財天に建てていきました。これが「鯨塚」と呼ばれる

石宮群です。勝山は代々新兵衛を名乗った醍醐家のもと、江戸時代を通じて捕鯨の里として栄えました。

大黒山の初代新兵衛定明の墓の脇には、江戸時代後期の狂歌師、蜀山人(大田南畝)の狂歌碑があります。「いさなとる安房の浜辺は魚篇に京といふ字の都なるらん」。いさなとは鯨のこと。勝山捕鯨の繁栄をよんだ歌です。

小林一茶、水戸黄門も訪れた

俳諧行脚で房総に足しげく訪れた小林一茶。俳諧仲間の醍醐家を訪れ、勝山浄蓮寺に八泊し、鯨見物もしています。水戸黄門・徳川光圀も水戸から鎌倉への道中、勝山を訪れ、大黒山で昼食し、眼前の浮島の景観に感動しています。

安房勝山藩と戊辰戦争

江戸時代には12000石の安房勝山藩が置かれ、勝山陣屋を中心に城下町の形態が出来ました。藩主は酒井氏で若狭小浜藩の支流、徳川譜代の家柄です。勝山港通り商店街の南側が陣屋跡で、山を背にし堀と土塁に囲まれ、敷地は約四千坪。現在は住宅地となりましたが、陣屋井戸や屋敷稲荷などは残っています。

幕末の戊辰戦争時には、旧幕府義軍の決起に巻き込まれる悲劇が起こります。幕臣の人見勝太郎、伊庭八郎ら幕府遊撃隊と木更津請西藩主林忠崇の義挙に房総諸藩はやむなく援軍を差し出すことになり、勝山藩からも福井小左衛門、楯石作之丞ら31名の藩士が義軍に加わり、箱根湯本で官軍と戦いました。敗れて帰藩した藩士たちには、官軍から厳しい責任追及が及び、勝山藩では福井と楯石両名が藩を救うために切腹しました。明治23年(1890)彼らを讃える勝山藩義士の碑が建立されています。

